

I

1 誕生

河のとどろきが家の裏手から聞こえてくる。ひびの入った窓ガラスの上を雨のしずくがするすると流れ落ちている。うす黄色い光も弱まって、部屋のなかは生温かでほの暗い。

生まれたばかりの赤ん坊はゆりかごのなかで動いている。お祖父^{じい}さんのジャン・ミシエルは戸口で木靴を脱いで足音をしのばせ、そつと入ってきたが、赤ん坊はもう泣き出した。母のルイザは自分のベッドの外に身体をかがめて赤ん坊をあやそうとする。そしてお祖父さんは、赤ん坊が暗がりを目を覚まして怖がらないように、手探りでランプの灯をつける。

すると、その灯火は、ごましおまじりの硬い口ひげをはやした老人の赤ら顔を照らし出した。気むずかしそうな眼光鋭い顔つきである。ルイザは赤ん坊のそばにあまり近寄らないように手で知らせる。彼女の羊のようなやさしい顔はやつれ、青ざめたあつい唇はきりつとむすばれずに、いつもおずおずと笑っている。彼女は、ごく小さい、何ともいえない優しい眼差しで、じっと赤ん坊を見つめている。

赤ん坊は目を覚まして泣く。ぼんやりしたその目が動く。ああ！　どんなにびっくりしたことだろう！　自分を取り囲む息づまるようなうじゃうじゃした闇の恐怖、にわかには強いランプの光、ぬっと自分にのしかかった大きな顔……何もかも得体の知れぬものばかりであった！　あまりの怖さに泣き出す力もなく、目も口も開けたまま、まるで釘づけにされたように、喉の奥であえぐように呼吸をしていた。「いやはや！　なんて醜い子だろう！　まるで赤鬼の児のようだ」と老人はしかたがないという調子で言った。

ルイザは叱られた小娘のように口をとがらせた。それをちらっと見て取ったジャン・ミシェルは、笑い声で「まさかお前さんだってこのわしからきれいな子だと言ってもらいたいのではあるまい？　お前さんだってそうは思っていないが。ななに、なにもお前さんの

せいじゃない。赤ん坊なんて、みんなこんなもんさ」

光の不意打ちに打ちのめされていた赤ん坊は、はじめてわれに返ったように泣きはじめて。母は手を差し伸べて「抱っこしてください」と老人に言った。彼はいつもの通り、まず理屈から始めた。「赤ん坊というものは、泣いたからと言って、言いなりになって甘えさせちゃいけない、泣くなら泣かせておけばいいのだ」

そうは言ったものの、老人は子供を抱きあげながらつぶやいた。「こんな赤鬼のような子をわしは見たことがない」ルイザはせかせかと子供を抱きとると、自分の胸に押し当てた。そして恥じ入ったような、また嬉しくてたまらないような微笑ほほえみを浮かべて我が子を見つめていた。

「まあ、かわいそうに、坊や！ お前はほんとうに赤鬼の児なんかね。なんて醜いんでしよう！ でも、母ちゃんは、お前がほんとうにかわいいのよ！」

ジャン・ミシェルはストープのそばへ戻って、不機嫌な顔つきで熾おきをかき立てはじめたが、どこかに隠しきれない微笑みを浮かべていた。

「なあにお前、そんなに心配していても始まらないよ。日がたてば変わるものだよ。それ

にそんなこと、かまうことがあるかい？　この子に望むことはたったひとつだ。ただまじめな人間になってくれ、ということだけだ」

子供は温かい母の体に触れると機嫌を直し、美味しそうに喉をならしてお乳を飲んでい
る。お祖父さんは椅子にかけ、反り身になって、

「まじめな人間ほど立派な者はない」

と、熱心にくり返した。そしてしばらく黙ってなにか考え込んでいたが、やがて腹立たしげにたずねた。

「お前さんの夫がここにいないとは、どうしたことだ？」

「劇場にいるでしょう、稽古がありますから」と、ルイザはおずおず答えた。

「劇場はもう閉まっていた。わしは今、あの前を通って来たところだ。また、あいつ嘘をつきやがって……」

「いいえ、あの人を責めないでください。わたしの思い違いかもしれません。どこか出張稽古で引き留められているに違いありません」

「それにしても、もうとつくに帰っていていい時だろう」

老人の機嫌が悪くなった。ルイザは声をしのばせ、すすり泣いた。

「あんな酔いどれを倅せがれに持つなんて、何の因果か知らないが……、わしはいつたい好運をもたらす神さまにどんな悪いことをしたのだろう？ わしは一生涯、なにかも我慢して暮らしてきた……。お前さんはあれのふしだらを止められんのかな！ それが女房の役目じゃないか？ お前さんさえ、あれを家へ引き留めておけば！……」

ルイザは肩を震わせ、声を立てて泣いた。

「わたしをもう叱らないください。わたしもほんとうに苦しんでいるんですから！ できるだけのことを尽くしてきましたつもりです……」

ルイザは痛ましそうにすすり声をあげた。老人はそばへ寄って、太い手をルイザの頭にかけて、

「さあ、さあ、心配しなさるな。わしがいるからな」

ルイザも赤ん坊のために気をとりなおし、笑顔を見せようと努めた。

「あなたもかわいそうだ、あの男はあなたにもよい贈り物じゃなかったな」

「わたしの過ちでございました。あの方はわたしなんぞを妻にする方じゃございませんわ。」

今では後悔していられるのですわ」

「何を後悔しているって？」

「お父さまもごぞんじですわ。ご自分でも、わたしがあの人の妻になったと言って、ご機嫌が悪かったのですもの」

「その話もう止そう。実のところ、わしも少しは心外だった。あいつのような青年、わしが丹精込めて育て上げた評判のいい音楽家で芸術家、——そういってもお前さんの気を悪くすることはあるまいが——それが身分の違う、音楽もできないお前さんよりは、もつと他の娘をもらつてもよかつたはずだよ。クラフト家の者が、音楽もできない娘と結婚するということは、百年あまりも昔から例のないことだからね！　そうかといって、わしは、知つてのとおり、少しもお前さんを悪く思っていないし、それどころか気心が知れてからは、愛いとしゅうさえ思っているのだから。それに結婚というものは一度してしまえば後には戻せないものだから、まじめにめいめいの務めを尽くすだけさ……：：：そうだろう」

二人はもう言葉を交わさなかつた。

ジャン・ミシェルはストロブのそばで、ルイザはベッドのうえに座つたままで、二人と